

「我心が歌う日本～駐日トーゴ共和国臨時代理大使の日本滞在記～」

序

本書は、若くして駐日トーゴ共和国臨時代理大使となった一青年外交官の、未知の国日本との出会いから、東京に大使館を開設し、外交活動に奮闘する日々を綴った日本滞在記である。

駐日トーゴ共和国臨時代理大使スティーブ・アクレッソ・ボジョナ閣下は、2009年から2010年にかけて、独立行政法人国際交流基金関西国際センター（以下、関西国際センター）が実施している外交官・公務員日本語研修に参加され、私は同研修の一担当者として日本語を教えた。その縁で、今回のご著書に序文を寄せるよう依頼を受けた。

今や一国の臨時代理大使でいらっしゃる立派な方を軽々しく「さん」づけで呼んでよいものかどうか躊躇う気持ちもあるが、私にとっては彼が研修参加者であった頃の呼び名がいちばん呼びやすいので、敢えてここでは「ボジョナさん」と呼ばせていただく。

ボジョナさんは、私が初めて出会ったトーゴ人である。おそらく多くの日本人がそうであるように、私もそれまで「トーゴ共和国」という国がアフリカのどこにあるのか、いや、正直に言えばそんな国があることすら知らなかった。ボジョナさんと私が初めて出会った関西国際センター、そして外交官・公務員日本語研修については、本書の中でも語られているが、当時の彼の印象、私が記憶しているボジョナさんをここで少しお話しさせていただきたい。

ボジョナさんは非常に表現力豊かな学習者だった。ある時、日本語のクラスでジェスチャーゲームをしたことがあった。一人の学生がカードに書かれている動作をして見せ、何をしているところかを他の学生が当てるというこのゲームは、ジェスチャーする学生に芝居っ気がないと、何をやっているのか当てるまでに時間がかかってしまい、効果が半減してしまう。そのとき、自らジェスチャー役を買って出てくれたのがボジョナさんだった。彼の素晴らしい名演技のおかげでクラスメートはゲームに熱中、その日のクラスは笑い声に包まれてたいへん盛り上がった。

もうひとつ覚えているのは、まだ基本的な語彙や文法しか習っていない頃から、彼が日本語で詩を書き Facebook にアップしていたことである。本書の中でも触れられているが、ボジョナさんは、もう一つのライフワークである詩作への情熱を日本語学習に活かすことによって、学習意欲を高めつつ語彙や表現を獲得していった。簡単な語彙とシンプルな文型で、深い意味世界を紡ぎ出す彼のセンスには驚かされたものである。

そして8か月後の歓送会で研修参加者代表挨拶スピーチを行うことになったとき、ボジョナさんはスピーチの終わりに自作の詩を朗読することを提案した。

フランス語・英語で書いたものを日本人の聴衆のために日本語で詠みたいということで、私は翻訳を手伝った。原詩の意味を保ちつつ日本語として響きの良いことばを探すのはなかなか難しかったが、なんとか形にすることができた。歓送会に集まった大勢の聴衆の前で、ボジョナさんはその詩を朗々とうたいあげ、感動的にスピーチを締めくくった。彼のスピーチを聞いた方は「8か月でここまで日本語が上手になるものか」と驚嘆したことだろう。その詩も本書の中に再録されているので、ぜひお読みいただきたい。

ボジョナさんの研修参加当時、トーゴはまだ在京大使館を開設していなかった。しかし、ボジョナさんの帰国後まもなく大使館が開設されることになる。その辺りの経緯、そして彼自身が身を以て経験した東日本大震災当日の出来事は本書の第4章で詳しく述べられているが、再び日本の地を踏んでからのまさに「東奔西走」のご活躍ぶり、日本国内の様々な場所に臨時代理大使自ら積極的に出向き、精力的に活動なさっておられるご様子を拝見し、心から嬉しく思っている。

本書からは、ボジョナさんの日本に対する想い、祖国トーゴに対する限りない愛、そして、外交官としての矜持と熱い想いが伝わってくる。彼を最初の外交使節団長に任じてくれて本当にありがとうとトーゴ外務省に感謝したい。ただ日本語がわかるからというだけでなく、全ての点においてボジョナさんこそその地位にふさわしい人材だと確信するからである。

外交官を目指す人、外交、国際関係、国際協力を学んでいる人、アフリカに関心を寄せる人、日本語教育関係者、一人でも多くの方々に本書を手にとっていただきたい。読者の皆様も、彼の詩を味わいながらその想いをきっと感じ取ってくださることと思う。

本書の終わりに述べられているように、やがてボジョナさんも日本を離れる時が来るだろう。いつかまた「駐日大使」となって日本へ戻ってきてくれることを願ってやまない。その時にはぜひ、外交官・公務員研修の歓迎レセプションでご挨拶をいただきたい。その時、どんな詩を詠んでいただけるだろうか。その日を心待ちにしている。

平成 27 年 10 月 28 日 大阪 りんくう
タウンにて

ひろが
廣利 正代

「私の日本日記～駐日トーゴ共和国臨時代理大使の日本滞在記～」

<内容>

1. 日本との出会い

駐日トーゴ共和国臨時代理大使として大阪を頻繁に訪れる理由をよく聞かれるが、それは、国際交流基金関西国際センターで日本語研修を受けるため、初めて滞在了した日本の町が大阪だったから。当初大阪に向かう飛行機の中では日本語が本当に習得できるのかと不安だったが、「外交官・公務員日本語研修」プログラムが大変素晴らしく、日本人教師のプロ意識や地元の方々のおもてなしにより非常に有意義な滞在となった。

そして研修プログラムの内容で特に素晴らしかった点として、①個人研修旅行(長崎に行き日本の基督教の歴史を学習)、②日本文化の体験(茶道、着物、書道等)、③祖国についての発表の3点についてそれぞれ述べた上で、祖国トーゴについて(歴史、気候、世界遺産、日本との関係等)の発表のために、当時自分で用意した日本語の原稿を複数並べて披露している。

国際交流基金で受けた研修の雰囲気を読者にも感じて欲しいとの意図から、当時の教師の赤字添削が入っている箇所はそのまま掲載。そして研修修了時に研修参加者代表として外務省で挨拶を行った際の原稿や、トーゴに帰ってから、トーゴを兼轄する、駐コートジボワール日本大使館に宛てた御礼の手紙なども披露している。いずれも本人が日本語で書いたもの。

2. 日本語への情熱

なぜ日本語がこれほど好きなのか。自身が情熱を抱いている「日本語」と「作詩」の両方を合わせて、日本語で詩を書くことで日本語学習をしようと考える。後に詩集「希望のベール」や「夢想」に収録されることとなった、日本を若い女性に喩えて日本への愛情を表した詩や、日本とトーゴの協力関係を讃えた詩、日本に対する印象を表した詩を紹介。またフランス語で書いた詩の翻訳版として「心から心へ」を日本で出版したことについても触れ、この詩集についての簡単な紹介も。

3. 運命に導かれ『おもてなしの国』日本を再訪

駐日トーゴ共和国大使館を開設するという任務を背負い、臨時代理大使として日本を再訪することになった経緯を説明。大使館開設に際しての苦労話と同時に、既に日本に友達がいたことにより助けられたことや、研修のおかげで日本語が話せたことで任務が容易化された経験を語る。そして東日本大震災に遭った時のことを語り、地震から感じたことを表した詩を紹介。

4. 大使館開設そして外交活動

大使館開設後の活動について。特に2011年6月にトーゴ共和国大統領が来日した際のこと、日本においてトーゴをPRするための数々のイベントや、トーゴの有名歌手キング・メンサーのコンサートを開催したこと等について回想。また、日本に来たことでインスピレーションが湧き、多忙なスケジュールを縫って多くの作品を書き、勇気を持って出版するに至った。

5. 2010年から2015年の間に行ったスピーチの抜粋

トーゴ共和国大使館の活動の中で行った数多くのイベントで行った本人のスピーチを紹介

6. そろそろ終わりにしましょう…

この著書を締めくる前に、詩を愛する自分にインスピレーションを与えてくれた思い出として「桜」と「富士山」について書いた詩を紹介

7. 日本について思うこと

本著の結論にあたる最終章では、日本への思いは詩を通してが一番伝えられるということから、最後に日本への思いを表した詩を紹介。日本にはできる限り長くいたい気持ちでいっぱいであると述べ、いつか日本を離れないといけない時が来ても、日本に来ることができた喜びを胸に、日本と初めて出会った時から自身の才能が開花していった経緯を本著を通して日本の友人の皆様と共有できたことを嬉しく思いながら旅立ちたいと思うとのメッセージで締め括られる。